

【目的】 近年食物アレルギー患者は増加傾向にある。ミルクやそば、米などのアレルギーが多い小児患者のみならず、エビ、カニなどのアレルギーを有する成人患者も潜在的に増加しており、罹患患者は小児から成人までが食事という生の根幹において日々QOLが妨げられている。食物アレルギーの発症メカニズムには諸説があるが、近年、食物成分に含有されるアレルゲンが皮膚に接触して感作が成立するという経皮感作説が注目されている。我々は、漢方（中医学）やアーユルバーダ、ユナニ医学など1,000年以上に渡ってヒトへの投与が記録されている伝統医学に注目し、伝統医学で利用されている様々な生薬や伝統薬物の有用性の検討を続けている。これら伝統薬物は安全に長期間の摂取が可能なものが多く、食物アレルギーの予防・治療に有用性が高いと考えられる。本研究では、2種類の経皮感作食物アレルギーモデル動物を用いて、東洋の知を集積した伝統薬物の中から、食物アレルギーの予防・治療能を有すると期待される3種類の生薬・伝統薬を選択し、その有効性を科学的に検証した。

【方法】 8週齢の雌のBalb/cマウスに0.5mgのオブアルブミン（OVA）を濾紙に染み込ませて背部に塗布し、感作を繰り返すことでOVA経皮感作食物アレルギーモデルマウスを作製した。このマウスに、種々の濃度のモリンガを餌に混じて持続投与し、OVAを経口負荷（チャレンジ）した後に直腸温と血清IgE値を検討し、モリンガの食物アレルギー抑制効果を検証した。また、4週齢の雌のBalb/cマウスに、0.1mgのトロポミオシンを濾紙に染み込ませて背部に塗布し、感作を繰り返すことでトロポミオシン経皮感作食物アレルギーモデルマウスを作製した。このマウスに消風散や桂枝加芍薬大黃湯を低用量、あるいは高用量投与し、トロポミオシン経口投与（チャレンジ）した後に直腸温と血清IgE値、およびアナフィラキシースコアを検討し、消風散や桂枝加芍薬大黃湯の食物アレルギー抑制効果を検証した。

【結果】 OVA感作モデルマウスの実験では、モリンガ低用量投与群は、他の群に比してチャレンジ後の直腸温の減少が軽微であった。トロポミオシン感作モデルマウスの実験では、消風散高用量群でIgE値の上昇が抑制されており、1回目のチャレンジ後にアナフィラキシーを生じた個体は認められなかった。2回目のチャレンジ後も消風散低用量群、高用量群はいずれもアナフィラキシースコアが低値であった。本研究では、検討した伝統薬物それぞれに食物アレルギー抑制効果が認められた。使用した実験系が異なるため、効能を単純に比較することはできないが、アーユルバーダ、ユナニ生薬の一つであるモリンガと、漢方方剤である消風散には食物アレルギーを抑制する作用があると考えられた。

伝統薬物投与におけるアナフィラキシーの改善効果

